

一般社団法人日本森林学会 2017(平成29)年度事業報告

(事業期間:2017年3月～2018年2月)

(1)「日本森林学会誌」の発行: 2017年4月(第99巻第2号), 6月(同3号), 8月(同4号), 10月(同5号), 12月(同6号)および2018年2月(第100巻第1号)の年6回発行し, 科学技術振興機構のJ-STAGEで公開した。論文21編, 短報8編, 総説3編, その他(巻頭言・書評・研究資料)4編および学会記事を掲載し, 総計258ページとなった。ページ数は昨年度に比べて約18%減であった。第100巻第1号より, 表紙写真を変更した。また, 第100巻に掲載予定の特集企画案の募集を行った。

(2)「Journal of Forest Research」の発行: 2017年4月(Vol. 22 No. 2), 6月(No. 3), 8月(No. 4), 10月(No. 5), 12月(No. 6)および2018年2月(Vol. 23 No. 1)の年6回発行した。特集“Fir species and forests”, “Radiocesium dynamics in forest ecosystems after the Fukushima Nuclear Power Plant accident: Experiences during the initial five years”を含めたReview3編 Original Article 35編, Short Communication 15編を掲載した。総ページ数は396ページとなり, 昨年度と同ページ数であった。JFR編集委員の部門区分を見直し, これまでの3つの大区分から, 4つの区分(Socioeconomics, Planning, and Management; Forest Environment; Silviculture and Plant Sciences; Forest Health)に変更した。電子版の周知を図るため, メールマガジンを用いて会員に発行を知らせるとともに, 日林誌と学会ウェブサイトでは発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2016年のImpact Factorは0.667で, 2015年(0.929)より低下した。2015年の5-year Impact Factorは1.121であった。

(3)「森林科学」の発行: 2017年6月(80号), 10月(81号), 2018年2月(82号)の年3回発行した。特集「これからの低コスト再造林技術—地域によるカスタマイズと現場からの提案—」「森から生まれる新素材「セルロースナノファイバー」を紐解く」「観光のグローバル化に向けた森林管理のあり方」をはじめ, 林野庁長官沖修司氏の巻頭言(82号)や新シリーズ「森をたべる」、シリーズ「森めぐり」「現場の要請を受けての研究」「うごく森」「森をはかる」「林業遺産紀行」等, 総計174ページを掲載した。オンラインバックナンバーについては, CiNiiからJ-stageへの移行を完了し, 74号を除く全ての号を公開した。在庫調整分の冊子体バックナンバーを編集委員や関連団体に分配し, 学会入会や購読の促進等のために有効活用した。連載コラム「森の休憩室 II 樹とともに」(著者:二階堂太郎)の内容が書籍化され, 『植物園で樹に登る—育成管理人の生きもの日誌』として築地書館から出版された。なお, 著作権については移譲せず, 出版社に利用許諾を与え, その使用料は請求しない形で契約した。

(4)「日本森林学会メールマガジン」の発行: 第82号(2017年3月)～第93号(2018年2月)を発行した。

(5)ウェブサイトの更新: ウェブサイト更新を随時行い, 最新情報を掲載した。大会や表彰をはじめとする各種の学会情報を会員に発信するとともに, 学会刊行物などの学会活動について随時発信・広報した。大会発表申し込みおよび発表要旨集のオンライン入稿を支援した。大会ページの視認性・わかりやすさを高めた。その他, 研究集会・シンポジウムや公募等の関連情報を提供・広報した。また, ウェブサイトの常時SSL化を行い, セキュリティを強化した。

(6)第 128 回日本森林学会大会の開催: 鹿児島大学郡元キャンパスおよび鹿児島県民交流センター(鹿児島市)で開催した(2017年3月26~29日;大会運営委員長:曾根晃一会員,鹿児島大学)。研究発表は総計840件で,内訳は部門別口頭発表187件,部門別ポスター発表436件,公募セッション口頭発表108件,公募セッションポスター発表48件,企画シンポジウム口頭発表61件であった。高校生ポスター発表を併催した。公開シンポジウム「木質バイオマス利用の現状と将来」を,国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて開催した。学会企画として,「林政・風致・経営,観光・レクリエーション,教育分野のあり方検討会」,「大学院進学とその後の進路の選択—どのように社会に出ていくのか—」および「論文執筆や審査の経験を共有しよう Part 2—回答書や英語論文を書いてみる—」を開催した。「第128回日本森林学会学術講演集」を発行した。

(7)第 129 回日本森林学会大会の開催準備: 高知大学朝倉キャンパスおよび高知県立県民文化ホール(高知市)での開催を準備した(2018年3月26~29日;大会運営委員長:後藤純一会員,高知大学)。2017年5月25日に高知大学において大会運営委員会引継会議を開催した。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し,公募セッション9件,企画シンポジウム15件を採択,14の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第5回高校生ポスター発表を企画し,全国の高校からの発表申込を受け付けた。公開シンポジウム「林業大学校~その役割と目指すもの~」を企画した。学会企画として「観光レクリエーション分野のあり方検討会」,「男女共同参画ランチョンミーティング「海外滞在と研究者家族」,「大学院進学とその後の進路の選択—公立研究機関,行政機関への就職—」および「論文執筆や審査の経験を共有しよう Part 3 ~男女共同参画の観点も含めて~」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い,「第129回日本森林学会学術講演集」を編集した。

(8)第 130 回日本森林学会大会の開催準備: 関東森林学会の推薦に基づき,大会開催機関を新潟大学とし,大会運営委員長(紙谷智彦会員,新潟大学)を委嘱し,大会運営委員会を組織した。

(9)日本森林学会各賞の選考および日本農学賞等への学会推薦: 日本森林学会賞は,陶山佳久会員(東北大学)の「森林生態・遺伝育種学的研究のための分子生物学的分析手法の開発と普及」,田村淳会員(神奈川県自然環境保全センター)の「丹沢山地のブナ林の衰退と再生に関する一連の研究」に,日本森林学会奨励賞は小林真会員(北海道大学)の「Differences in soil type drive the intraspecific variation in the responses of an earthworm species and, consequently, tree growth to warming」,梅林利弘会員(北海道大学)の「Spatial distribution of xylem embolisms in the stems of *Pinus thunbergii* at the threshold of fatal drought stress」に,日本森林学会学生奨励賞は邱滇璋会員(投稿時:九州大学 応募時:東京農工大学)の「Scaling-up from tree to stand transpiration for a warm-temperature multi-species broadleaved forest with a wide variation in stem diameter」に,日本森林学会功績賞は,金子真司会員(森林総合研究所)の「東京電力福島第一原子力発電所事故による森林放射能汚染対策への貢献」,紙谷智彦会員(新潟大学)の「ブナ林の生態的解明に基づく持続的利用に関する研究」に授与することを決定した。また,Journal of Forest Research 論文賞は,JFR 論文賞選考委員会が選考し,理事会で審議した結果,同誌21巻5号に掲載のWei Wang, Yuichi Hanai, Chisato Takenaka, Rie Tomioka, Kazuya Iizuka, and Hajime Ozawa「Cesium absorption through bark of Japanese cedar (*Cryptomeria*

japonica」に、日本森林学会誌論文賞は、日林誌論文賞選考委員会が選考し、理事会で審議した結果、99巻2号に掲載の山田 祐亮「市町村森林整備計画におけるアダプティブ・マネジメント応用の可能性」に、第128回日本森林学会大会学生ポスター賞は、ポスター賞選考委員会で選考し、理事会で審議した結果、21名の学生会員に授与することを決定した。また、日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、日本農学進歩賞、日本農学会賞について、会員からの推薦を受け付け、理事会で本学会推薦業績を決定した。その結果、中島徹会員が平成29年度(第16回)日本農学進歩賞を受賞した。

(10) 学会活動の活性化: ウェブサイトやメールマガジン等による広報活動、および連携学会・他学会・外部機関との連携強化を通じて、学会活動の活性化に努めた。

(11) 男女共同参画の取り組み: 2017年12月11日に男女共同参画学協会連絡会の運営委員会に参加し、議題について話し合いを行った。また、第129回大会におけるランチョンミーティング「海外滞在と研究者家族」(2018年3月28日)を、男女共同参画学協会連絡会の後援のもとで準備を行った。

(12) JABEE(日本技術者教育認定機構)への協力: JAFEE(森林・自然環境技術者教育会)の基幹的な学会として、JABEEやJAFEEの活動・運営に協力し、関連学協会との連携を図り、森林分野の技術者教育の向上を進め、CPD(技術者継続教育)事業の推進に協力した。

(13) 連携学会(旧支部)との連携: 各連携学会(北方森林学会、東北森林科学会、関東森林学会、中部森林学会、応用森林学会、九州森林学会)大会を共催し、会長ほか役員を派遣した。また、2017年12月に第463回理事会と併せて連携学会長会議を開催し、各連携学会の活動状況と課題を共有した。

(14) 日本木材学会との連携: 「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき、相互に理事を派遣し、また学術大会へ役員を招待した。

(15) 公開シンポジウムの開催: 2017年5月23日、東京・日林協会館において公開シンポジウム「山・川・海の変貌と森林管理」を主催した。第129回大会の公開シンポジウム「林業大学校～その役割と目指すもの～」を企画し、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募、採択され、準備を進めた。

(16) 国際学術交流の推進: 東アジアをはじめとする諸外国との国際的学術交流を進めた。Chinese Society of Forestryは2017年4月に学会100周年を迎えたことから、「日本森林学会とChinese Society of Forestryとの交流に関する覚書」に基づき、日本森林学会より100周年に対する祝辞を送付した。

(17) 関連学協会への協力と社会連携の推進: 協力学術研究団体として日本学術会議に協力し、日本学術会議の会員および連携会員の候補者を推薦した。日本農学会の運営に協力し、評議員と運営委員を派遣した。日本農学会シンポジウム「大変動時代の食と農」(2017年10月14日、東大弥生講堂)の企画に協力し、本学会の会員が講演した。防災学術連携体に参加し、シンポジウム「熊本地震・1周年報告会」(2017年4月15日、熊本県庁地下大会議室)で本学会の会員が講演した。日本木材学会および土木学会とともに「土木における木材の利用拡大に関する横断的研究会」を構成し、木材利用シンポジウム in 長崎「これからの木材利用～ながさ木で繋ぐ技術

者の“和”～」（2018年1月23日、ホテルセントヒル長崎）を開催した。科学技術振興機構からの依頼により植物資源環境技術の研究開発（フューチャーグリーン）について本学会から課題の提案を行った。丸善出版より「森林学の百科事典（仮題）」出版の提案があり、編集幹事会を組織した。ウッドデザインサポート連絡会に参加した。岐阜大学流域圏科学研究センターからの要請により、共同利用・共同研究拠点への認定に関して当学会から文部科学省へ要望書を提出し支援した。第16回木材利用研究発表会（土木学会木材工学委員会）、第7回早生植林材研究会シンポジウム—荒廃農地の活用と早生樹材利用—（日本木材加工技術協会関西支部）、森林総合研究所公開講演会「木を使って守る生物多様性」（森林総合研究所）、平成29年度公開セミナー「REDD プラス展開の鍵は何か？—現場活動から見えてきた、REDD プラスの実践手法—」（森林総合研究所 REDD 研究開発センター）、森林・林業教育シンポジウム「森林・林業の専門教育を語る」（森林総合研究所多摩森林科学園）、フィンランド・日本合同シンポジウム「レーザセンシングによるICTスマート精密林業 in 東京」（LSによるスマート精密林業コンソーシアム）および第20回日本水大賞（日本河川協会）をそれぞれ後援した。流体力学基礎講座—基礎学理から数値流体力学・流体計測の基礎と実例まで—（日本機械学会）、日本流体力学年会2017（日本流体力学会）、第13回バイオマス科学会議（日本エネルギー学会）、第5回アジアバイオマス会議（日本エネルギー学会）、をそれぞれ協賛した。

(18)国内研究機関連携の推進：森林・林業関係試験研究機関の現状と研究推進上の課題に関するアンケート調査の結果を取りまとめ、ウェブサイトに掲載した。

(19)各種補助金の申請：応用森林学会の発案により、公開シンポジウム「四国の竹林管理と竹材の新たな利用」(2017年11月)への助成を受けるため、日本森林学会として申請していた2017年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」が採択された。第129回大会で開催予定の公開シンポジウム「林業大学校～その役割と目指すもの～」については、国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」に応募し採択された。

(20)他機関等の賞、奨励金、助成金、公募等の広報および候補の推薦：ウェブサイト、メールマガジン等により会員に対して随時、情報提供を行った。

(21)学会運営の改善：役員間や各委員間の連絡、代議員や会員へのお知らせに電子メールを活用し、会議費と通信費を節減するとともに、意思決定や情報提供の迅速化に努めた。計10回の理事会のうち6回はメール理事会による。

(22)林業遺産の選定：新たに林業遺産 No.17「伊豆半島の森林史に関する資料」および No.18「小石原の行者杉」、No.19「屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡」、No.20「蒸気機関車「雨宮 21 号」と武利意・上丸瀬布森林鉄道遺構群」、No.21「初代保護林 白髪山天然ヒノキ林木遺伝資源保存林」、No.22「木曾式伐木運材図会」、No.23「足尾における治山事業による緑の復元」の7件を新規に、No.13「吉野林業」の1件を追加で認定し、2016年定時総会で発表した。会員を通じて2017年度林業遺産候補の推薦を募り、林業遺産選定委員会において審議を進めた。また、第129回日本森林学会大会において

林業遺産に関する企画シンポジウムと公募セッションの開催の準備を進めた。

(23) 中等教育との連携: 第 128 回日本森林学会大会において第 4 回高校生ポスター発表を実施した。発表数は 19 件, 参加校数は 16 校で, その中から最優秀賞, 優秀賞および学会長特別賞をそれぞれ 2 件ずつに授与した。当日の概要と講評を森林科学 80 号に掲載した。また本年度からは常置委員会として, 運営体制を改善し, 第 129 回大会における第 5 回高校生ポスター発表の準備を進めた。

(24) 代議員および理事・監事候補選挙: 2018 年 5 月から 2020 年 5 月を任期とする代議員選挙 (10 月 15 日告示, 11 月 30 日投票締切), 代議員選出理事・監事候補互選投票 (12 月 20 日告示, 1 月 7 日投票締切), 会長・副会長候補互選会議 (3 月 6 日) を行った。代議員選挙と理事監事互選投票の投票率はそれぞれ 41.9%, 92.3%であった。

(25) 一般社団法人としての対応: 大会担当理事の交代に伴い, 理事を修正登記した。

(26) 会員数の動向:

	2015/3/1	2016/3/1	2017/3/1	2018/3/1	前期との差
正会員	2443	2396	2435	2383	△ 52
国内一般会員	1868	1822	1871	1839	△ 32
a) 日林誌のみ	1297	1279	1311	1283	
b)+JFR	86	80	83	85	
c)+森林科学	222	209	215	218	
d)+両誌	263	254	262	253	
国内学生会員	561	563	553	533	△ 20
a) 日林誌のみ	527	523	514	485	
b)+JFR	2	3	8	13	
c)+森林科学	11	13	10	13	
d)+両誌	21	24	21	22	
海外在住一般会員	8	4	7	6	△ 1
a) 日林誌のみ	7	3	6	4	
b)+JFR	0	0	0	1	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	1	1	1	1	
海外在住学生会員	6	7	4	6	2
a) 日林誌のみ	3	3	1	2	
b)+JFR	3	4	3	4	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	0	0	0	0	
機関会員	124	114	112	110	△ 2
国内機関	119	112	110	108	
海外機関	5	2	2	2	
賛助会員	40	39	39	38	△ 1
合計	2607	2549	2586	2531	△ 55
準会員	251	247	229	226	△ 3